

日外協「海外安全シミュレーションセミナー」

海外で社員が誘拐やクーデター、戦争に巻き込まれたら――。

実践的なシミュレーションを通じて具体的な対応を、危機管理のエキスパートと共に考える。

今年度は7月7日、初めて対面とオンラインのハイブリッド形式で開催。どんなセミナーなのか。

第1部 誘 拐

講師：(株)オオコシセキュリティ・コンサルタンツ
シニアコンサルタント 松丸俊彦氏

1年間に世界で起こる身代金誘拐事件は約3万件！ 報道されないものも含め、邦人が巻き込まれるケースもある。「今日まで何も起こらなかった」、だからといって、「明日も何も起こらない」とは言えない。

今、貴社の海外現地法人で誘拐事件が起きたら……、体制・対応は？

【誘拐シミュレーション】

日本本社からの出張者Aさんが、空港から現地のホテルに向かう途中で誘拐された。

誘拐には11のフェーズがあるという。犯行グループによる①ターゲットリストの作成、②内偵・調査、③標的の最終決定、④誘拐実行、⑤人質移送、⑥人質拘束。そして、⑦交渉、⑧身代金支払い、⑨人質解放、⑩解放後のケア、⑪警察による捜査。それぞれのフェーズでどうすればよいか、参加者によるグループディスカッションも交えながら、解決策を探る。

例えば、

――Aさんが行方不明に。どうする。

POINT! この時点で誘拐と断定せず、その他の可能性も含め確認をとる。

――Aさんが誘拐されたことが判明。本社・現地対策本部として早急に対応すべきことは何か。

POINT! 家族対策、外務省(大使館)支援要請、

広報対策。

――犯人側との人質交渉で気を付けるべき点。

POINT! 犯人との連絡窓口、本人の生存確認など。

平素の準備が対応の成否を決める誘拐事件は、危機対応の典型と言ってよい。事件解決まで長い期間と人手がかかり、マスコミ報道の真ただ中に置かれる。被害者の命が目の前で脅かされることなど通常業務では考えられない。被害者(社)にとってはもちろん初めての経験。警察などの組織・対応能力も国によって異なる。

シミュレーショントレーニングを通じて、各社の仕組みで足りないところを確認することができる。

誘拐犯を挑発してはならない

自身が誘拐に遭遇し銃を突き付けられたら。

松丸氏によると、「決して抵抗しないこと」「誘拐犯と目を合わせてはいけない。下を向かず、相手の動作(指示)が見えるよう胸のあたりを見る」「掌を相手に見せ無抵抗の意思を表す」「武器を取り出すのではと勘違いされ撃たれる恐れがあるので、動作はゆっくりと。ポケットに手を入れてはいけない」。

身代金目的誘拐事件は防げる

誘拐に遭わないために、通勤の時間・経路を変える、通勤途上の避難・助けを求められる場所を確認しておく。犯人にとって身代金誘拐は命を懸けたビジネス、失敗は許されない。実行前に綿密な調査・下見が行われる。調査・下見に気付く注意と警戒を。不審な出来事には、すぐに相手に分かる反応を示す。十分に警戒して